訓点資料として見た金沢文庫本白氏文集所収「長恨歌」について

渡辺　さゆり

1．はじめに

白氏文集は、作者白居易の生前[*1]から日本に伝えられ隆盛したとされている。清少納言『枕草子』には「文は文集、文選、博士の申し文」、『紫式部日記』には「宮の御前にて文集のところどころ読ませ給ひなどして・・・・・楽府といふ書二巻をぞしどけながら教へたて・・・・」とあるように、“文集”と言えば白氏文集を指すほど広く知られた作品であった[*2]。また平安時代中期以降は、皇室における個人的家庭教育のテキストとして白氏文集が学習されるようになり、その結果、行間、欄外などにヲコト点、声点や和訓或いは音注、義注が施されることとなった。それらの中には貴重な訓点資料としての評価を得て現存するものもある。

金沢文庫本白氏文集（以下、金沢文庫本）はそのような訓点資料のひとつであり、延べ31巻が国内数ヵ所に分散して現存している。その内25巻は鎌倉時代に豊原奉重及び豊原奉重に依頼された数人によって書写されたものである[*3]。奥書によると寛喜三年（1231）から貞永二年（1233）の約３年の歳月を書写に費やしている。豊原奉重はこの本文に対し、全巻に自ら朱墨両点を施しながら校正を加えた後[*4]、嘉禎二年（1236）、唐本（摺本）を以って朱墨の校点を加え、更に建長三年（1251）から建長四年（1252）「貴書[*5]の御本」を以って重ねて校点を施した。これらの校訂は、奉重の独力により成されたとされている。

また、金沢文庫本巻十二、巻五十二、巻四十九、巻五十九[*6]には、会昌四年（844）蘇州南禅寺において白居易が開成四年（839）に奉納し

た白氏文集を写して日本に伝えたとされる恵蕚[*7]の書写奥書が転写されており、恵蕚書写六十七巻本の転写本の可能性があることから、日本における白氏文集の伝来及びその後の流布を考える上で貴重な資料であると位置付けられる。

2．金沢文庫本所収「長恨歌」について

玄宗皇帝と楊貴妃の悲恋を描いた「長恨歌」は白氏文集巻十二に収められているが、中国のみならず日本においても愛好された作品のひとつである。日本において「長恨歌」は、『文華秀麗集』『和漢朗詠集』所収の漢詩に影響を与えただけではく、『源氏物語』桐壺巻では帝と桐壺更衣の愛と死別の悲哀を玄宗皇帝と楊貴妃に擬えて描く[*8]など、仮名作品にまでその影響が見られることは周知の事実である。

さて、前述した金沢文庫本に於いて豊原奉重による校訂本25巻中19巻は、現在大東急記念文庫に蔵されているが、「長恨歌」が収められている巻十二も同文庫に現存されており、影印本を通して閲覧することが可能である。それによると、金沢文庫本巻十二には「長恨歌」が「長恨歌伝」に続く形で掲載されており、両者は併行して学習或いは読まれたものと思われる[*9]。また、行間や欄外には多くのヲコト点、和訓が施され、訓点資料としての価値を有する。

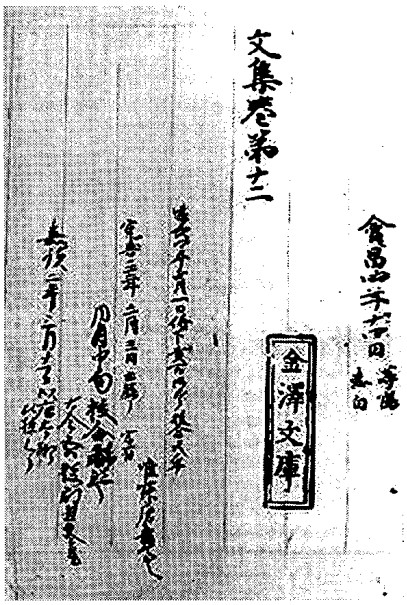
本稿では公刊されたテキストを使用し金沢文庫本所収「長恨歌」の加点状況における問題点を指摘し、さらに加点された内容に従って本文を読み下す事が可能か否かについて試行することとする。尚、『金沢文庫本白氏文集（一）』(勉誠社、1983）をテキストとして使用する。

3．金沢文庫本「長恨歌」の加点状況について

3－1. 金沢文庫本巻十二の冒頭及び奥書

「長恨歌」が収められている金沢文庫本巻十二の冒頭および奥書の影印及び、奥書の翻刻を掲載する。

《巻十二奥書》



《巻十二冒頭》

＜奥書翻刻＞

會昌四年十四日寫白等惠

文集巻第十二　　（印）

建長四年正月一日傳下貴所御本校合又畢」唯寂房書写之

寛喜三年三月三日書寫了　寂有」同日中旬校合移點了」

右金吾校尉豊奉重

嘉禎二年三月十一日以唐本聊」比校之了

巻十二は「會昌四年」の奥書から恵蕚書寫六十七巻本の転写本の可能性が存する巻であることがわかる。また、寛喜三年（1231）豊原奉重によって依頼されたとされる寂有によって書写され、同日奉重によって校合移点が行われ、嘉禎二年（1236）に唐本を以って校合し、更に建長四年（1252)、貴所の御本を以って校合を行っている。従って、豊原奉重は寂有が書写した本文に３回の校正書き入れを行っていることになる。

巻十二における唐本の校合は「摺」を伴って書き入れが行われているが、寛喜三年（1231）及び建長四年（1252）の書き入れに関しては、今

回使用したテキストがモノクロ版であり、朱墨及び濃淡を判断できかねることも考え併せ、その両点を区別することは困難であると思われる。

以下に摺本注記の例を掲げる。尚、行数は、使用テキスト巻十二に記載の数値を採用した。

《摺本注記例》

①巻十二268行

②巻十二289行

①、②とも、右注として記載された異文注記の例である。さらに①では、左注に仮名字音注「シム」が併記されている。

3－2. 加点状況の問題点

金沢文庫本巻十二の奥書より、豊原奉重による書入れが複数回行われ、さらにその判別が困難であることは前述した通りである。その事実を踏まえた上で「長恨歌」の加点状況について述べることとする。

「長恨歌」の本文は、補入を含め841字（標題「長恨歌」３字を除く）から成る。この841字中、全く加点が施されていない文字は36字である。加点率は95％強であり、金沢文庫本「長恨歌」は全文に亘り加点状況が密である訓点資料と言える。依って豊原奉重は、「長恨歌」全文に加点を施しながら学習を進めたことがわかる。同じ金沢文庫本でも、巻により書き込み数に偏りがあることはテキストを通観することによって明らかであるが[*10]、その中にあって「長恨歌」の加点率は卓越した数値である。

次に、加点内容であるが、金沢文庫本「長恨歌」にはヲコト点（博士家紀伝点）、声点、句読点、返り点（雁点及び一二点）、音合符、訓合符、仮名注（字音注、和訓注）及び音注（反切注、類音注）、義注、異文注

記が書き込まれている。但し、ヲコト点と仮名点が重複して加点されている例*11、音合符と訓合符が重複して加点されている例、音合符が加点されているにも関わらず和訓が書き込まれている例、訓合符が加点されているにも関わらず仮名字音が書き込まれている例など、読み下す際に問題となる例が散見することから、訓点の取り扱い方法には注意を要する。

以下に例を掲げる。

《ヲコト点と仮名点の重複》

③巻十二276行

④巻十二282行

⑤巻十二282行

③は「涙」に対しヲコト点「と」と仮名注「ト」、「血」に対しヲコト点「と」「の」と仮名注「トノ」が加点され、また④はヲコト点「て」が加点されているのと同時に仮名注「マカセテ」と「テ」が重複して書き込まれている。⑤は「来」に対しヲコト点「に」が加点されているが、左注に「ニ」と重複して書き込みがある。いずれも同内容の訓点が重複して加点されている例である。

《音合符と訓合符》

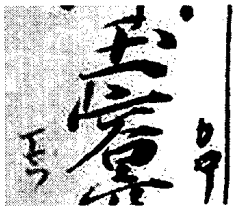
⑥巻十二265行

《音合符と和訓》

⑦巻十二277行

《訓合符と仮名字音の重複》

⑧巻十二297行



⑥は「凝脂」に対し音合符と訓合符が同時に加点されている。

⑦は音合符が加点されている「縈迴」に対し和訓「メクリ」が加点されている。

⑧は訓合符が加点されている「玉容」の「容」に対し仮名字音注「エウ」が加点されている例である。

以上は、本文を読み下すに当たり、判断に困難を伴う例である。「長恨歌」を流暢に読み下すためには、このような多くの情報は読者の混乱を招くだけであり、豊原奉重の加点態度に疑問を抱く原因ともなる。

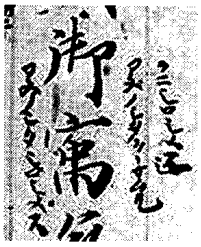
しかしこれらの加点状況から、豊原奉重がその本文に対し３回の書き入れを行ったことという校訂作業そのものを正確に反映しているとも考えられ、当時の漢籍訓点資料の学習方法を知るためには貴重な訓点資料であると言うことも可能である。

３－3. 和訓について

金沢文庫本「長恨歌」には、多くの和訓が加点されている。以下に、加点された和訓の例を掲げる。

《訓合符と和訓》

⑨巻十二262行



⑩巻十二267行

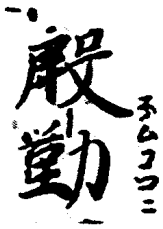
⑪巻十二294行

⑨⑩⑪は訓合符が加点され、更に和訓を書き込んだ例である。⑨は右注に「アメノシタヲ丶サムル／クニシロシメシ」、左注に「アメノシタシロシメス」とある。⑩は「アサマツリコトシ」、⑪は「イフナラク」とある。３例とも漢字そのものから和訓を導き出すことは困難な例である。

《音合符と和訓》

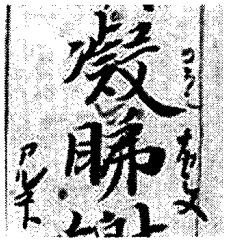
⑫巻十二263行

⑬巻十二290行



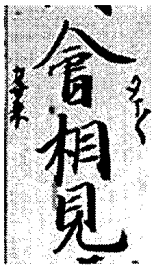
《複数の和訓》

⑭巻十二298行

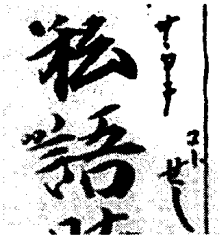


《声点と和訓》

⑮巻十二302行

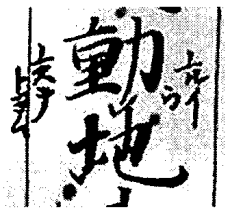


⑯巻十二304行



《読み下し方を指示する例》

⑰巻十二273行



⑫⑬は上記例⑦と同様に、音合符とともに和訓が書き込まれている例である。⑫は右注に仮名字音注「レイ」とあるが左注に「カタチヒト」と和訓を、また⑬は「殷勤」に対し「ネムコロニ」と和訓がある。尚、⑬ではヲコト点「に」と仮名注「ニ」が重複している。

⑭と⑮は複数の和訓が加点されている例である。⑭は「睇」に対し右注に「ナカシメ」、左注に「ミルコト」とある。⑮は「會」に右注として「タマタマ」、左注として「カサネ」が書き込まれている。

⑯は「語」に上声濁点が加点されているのと同時に「コトセシ」とある。「私語」を「サヽヤキコトセシ」と訓読する例である。

⑰は、右注に「ウ／ユルイ」と和訓がある。しかし左注には「ユステトヨム」と和訓を限定する注記が記載されている。漢籍訓点資料ではこのように加点者の指示を著すことはほとんどなく、希少な例である。

これらの和訓は、博士家の訓法を引き継いで記載したと思われるが、『類聚名義抄』『和名類聚抄』などの古辞書との関わりは、現時点で明ら

かになっておらず、今後の課題として残された問題である。

4．鎌倉時代の訓読と豊原奉重

平安時代の漢籍訓点資料は、大学寮を中心とする博士家とその関係者の専業であった。しかし鎌倉時代に入ると識字層が一部の貴族中心の社会から武家、さらには民衆へとその拡がりを見せていく。このような鎌倉時代の漢籍訓点資料は、平安時代における諸博士家（紀伝道では菅原家、大江家、藤原家（日野家・南家・式家））が家説としてそれぞれに固定させた訓法を基本的には忠実に伝えている。ただし、鎌倉時代は真言宗などの僧を中心に無名の僧もこれらの博士家による漢籍の訓読を学び、これを民衆に伝え啓蒙するようになった。この傾向は助長され各博士家の家説の原形が曖昧になっていき混合が進んだ*12。

金沢文庫本白氏文集を書写、校訂した豊原奉重は、鎌倉時代における京都の朝廷側の下級官人であり、その生没年や閲歴等は不明な点が多い人物である。特に博士家との繋がりがある人物でもないらしい。そのような観点からすると、鎌倉時代における漢籍訓点資料の実態を明らかにするために豊原奉重が校合した金沢文庫本白氏文集は歴史的に貴重な訓点資料であるといえるだろう。豊原奉重による書写、校訂本は、平安時代の訓点資料である天永四年（1113）加点神田本白氏文集*13の如く、その内容を理解しながら必要な情報のみを書き込み、複数の情報は合点によって採るべき訓を示すという加点態度を示したものではない。神田本白氏文集が原詩理解の学習態度を指し示しているのに対し、奉重の校訂本は、各博士家の訓法を基本的に踏襲する態度は認められるものの伝統的な訓法を可能な限り網羅しようとしたため、校合した各本のあらゆる情報を一本の中に蒐集した訓点資料となった。そのため、ヲコト点と仮名点による同情報の重複加点が為されたり、複数の和訓が書き込まれるなど、後世の読み手からすると、読み下すためには大変紛らわしい訓点資料となったのである。

しかし、奉重の学習態度は鎌倉時代の漢籍訓点資料の学習態度を反映

する確かな資料であることに変わりは無い。ただし、奉重が「長恨歌」を実際に日本語で読み下そうとしたのか否かが問題となるところであるが、全文に亘りヲコト点、仮名点、和訓等が加点されていることから、「長恨歌」を音読したのではなく読み下したであろうとの推察は可能である。そこで、金沢文庫本所収「長恨歌」に加点された訓点に従って全文を翻刻し、読み下すことを試みた。稿末にその訓読文を「資料１」として掲載した。

翻刻した結果、読み下すために読み手の判断が困難な箇所は存在するものの、加点された訓点に従って読み下すことは可能であることがわかった。

ただし、韻文を読む如くその形式に則って流れるように読み下すことはできないのが実情である。つまり金沢文庫本所収「長恨歌」は、豊原奉重が前代の訓法を踏襲しつつ学習したテキストであるという性格を有するため、一つの作品として内容を読み下すことに主眼が置かれたものと思われる。ここで注意すべき点は「長恨歌」に前置されている「長恨歌伝」の存在である。「長恨歌伝」においてその内容を学習した後、「長恨歌」は音読されたのではなく、訓読された。そのため「長恨歌伝」に比べ、加点された声点が少ないことも明らかとなっている[*14]。

豊原奉重の時代は、一部の貴族社会を中心としていた識字層が、下級官人、武家、無名僧侶への拡大が見られたたものの、依然、博士家の訓法が重んじられる時代であった。従って、豊原奉重には、韻律に則って「長恨歌」を詩として読むという意識が、未だ無かったのではないかと思われるのである。

５．まとめ

以上、金沢文庫本所収「長恨歌」について、その加点状況の問題点を明らかにし、翻刻して読み下すことを試みた。

その結果、金沢文庫本所収「長恨歌」は、その加点状況から、ヲコト点と仮名点による同内容の重複記載、和訓の重複記載、音合符と訓合符

の併記など、読み下す際に読み手の判断を困難にさせる内容を有する訓点資料であるが、全文に亘り加点されていることから、加点内容に従って読み下すことが可能な訓点資料であることが分かった。また、加点状況に問題点は存するものの、平安時代における博士家の訓法を基本的には忠実に固守する姿勢が認められることから、鎌倉時代における新しい識字層によって学習された漢籍訓点資料の実情を反映している貴重な資料であるといえる。

尚、行間に書き込まれた多くの和訓の典拠に関しては課題として残ることとなった。今後引き続き検討を続けることとする。

資料１　《金沢文庫本白氏文集「長恨歌」訓読文》

【凡例】

・金沢文庫本白氏文集所収「長恨歌」を、加点された訓点に従って読み下した内容を翻刻した。
・行数は、本稿で使用したテキスト『金沢文庫本白氏文集（一）』（勉誠社、1983）に記載の行数を採用した。
・声点及び、行間、欄外に書込まれた反切注、類音注、義注は省略した。但し、声点は、《声点一覧》としてまとめたものを添付した。
・返り点、見消、合点、異本注記は省略した。
・ヲコト点は平仮名、読点は「、」、句点は「。」、音合符は「－」、訓合符は「＿」、音合符と訓合符が併記されている場合は「＝」、仮名注は片仮名で表記する。
・傍訓或いは音を記す仮名注は「　」で括り、複数の仮名注が存する場合名は「／」を用いて表記する。また、左注には「１．」を付記する。
・漢字はjis第一水準、第二水準の範囲内の漢字を使用することを原則とした。
・補読した部分は（　）で括る。
・句読点は無いが、文が切れると私に判断した箇所は、一文字分空白とした。
・不読字は〔　〕で示した。
・解読不可の箇所は□で示した。

＜訓読文＞

261　長恨歌
262　漢－皇、色を重て傾－国を思（ヒ）、御＿宇「アメノシタヲ丶サムル

／クニシロシメシ／1．アメノシタシロシメス」こと多年、求めると「1．トモ」得不。楊－家女「ムス」(メ) 有（リ)、

263 初（テ）長「1．ヒ」＿成「セリ／1．レリ」、養レて深－窓「1．サウ」に在（リ）て、人未（タ）識不。天の生「レハ／1．ナセル」麗「1．キ」－質「シツ／1．スカタナレハ」、自「ミ／1．ヲ」(ラ) 棄（テ）難（シ)、一－朝に

264 選レて君－主の側に在（リ)。眸を迴て一「ヒ」笑ムトキに百の媚「コヒ」生ル、六－宮の粉－黛は顔－色無（シ)。春

265 寒て浴を華－清の池に賜ハル、温－泉、水＿滑（カ）に（シ）て凝「キ／1．タル」＝脂「シ」を洗「ア／1．スヽク」。侍＝兒「キモ／1．ワラヘ」、扶「タスケ」＿起「トモ／1．オコシ」て嬌「コヒ」て

266 力無(シ)。始て是レ新に恩－澤「タク」を承「シ」(ス)時なり。雲の鬢か、花の顔、金の歩＝揺「1．カムサシ」、芙「フ」－蓉の「ノ」、帳暖「アタヽカ」て

267 春の宵「ヨノ」を度（ル)。々（ノ）々、苦＿短「イト／1．ナケキ」、日＿高て起「ヲ」(キ)、此従（リ)、君－主、早＿朝「アサマツリコトシ」不。歓「クウ」を承（ケ)、

268 寝「1．シム」に侍て閑＿暇「カ」無（シ)、春は春の遊に従（ヒ)、夜は夜を専（ト）す。漢－宮の佳－麗「レイ／1．カタチヒト」、三－千－人、三－

269 千の寵「テウ」－愛一－身に在(リ)。金－屋に粧「ヨソ」＿成て、嬌（トシ）て夜を侍ヘリ、玉－楼に宴＿罷「ヤムテ」て酔て春に和す。姉－

270 妹、弟－兄、皆列－土ナリ、憐（ム）可（シ)、光－彩「サイ」の門－戸に生「ル／1．レルコト」ことを。遂に、天－下の父－母の心を(シ)て、

271 男を生ことを重ず(シ)て、女を生ことを重セラム。驪－宮高(キ)＿處、青－雲に入レリ、仙ノ樂を、風に飄「ヒ」て處＿々に

272 聞ユ。緩＿歌、慢「ユルク」＿舞て絲－竹を凝「コラ」（シ)、盡＿日に君－主看「ミ」こと足「アキ」不。漁－陽の鞞＝鼓「フリツヽミ」、

273 地を動「ウ／ユルイ／1．ユステトヨム」て来ル、驚＿破「1．ソヽヤ」、霓－裳の羽－衣の曲ヲ。九－重の城－闕に、煙－塵生ナル。千－乗「シヨ」の、

274 万－騎、西－南に行（ク)。翠－花揺「エウ」－々と（シ）て行て復、止「トヽマル」、西の方、都－門を出（ル）こと百－餘－里。六－

275 軍發「オコ」（ラ）不、奈＿何「1．ナニ」こと無（シ)、宛－轉たる蛾－眉「ヒ」、馬の前に死ヌ。花ノ「1．ノ」－鈿「1．カムサシ」地に委て人の収ムル無（シ)。

276 翠－翹「シヤ／1．ケウ」金－雀、玉搔「サウ」－頭「1．サシクシ」。

君－主眼を掩て「ヲホテ」救（フ）こと得不。迴（テ）看ル１．ニ、涙と「ト」血との「トノ」

277 相＿和て流（ルル）を。黄－埃「１．チン」散－漫と（シ）て、風蕭－索「サク」たり。雲の桟「カケハシ」、縈－迴「メクリ」て剣閣に登(ル)、蛾－

278 嵋の山の下にて行－人少シ。旌－旗「セイキ」、光無(ク)て日の色薄シ、蜀ノ－江は水碧「ミ」にて蜀「シヨク」の山

279 青(シ)。聖－主朝－々暮－々の情。行の－宮に月を見レハ、心を傷す色、夜の雨に猿を聞（ク）は腸

280 断の聲。天＿旋「メクリ」、日転「メク」(リ)て龍－馭を「シヤニ」迴す、此に到て躊「チウ／１．チウ」－躇「チヨシテ」(シ)て去(る)こと能(ハ)不。馬－嵬坡「ツヽミ」の下「モ」、

281 泥－土の中に、玉ノ－顔ヲモ見エず、空（シク）死たる處ノミアリ。君－臣、相顧「カヘリミテ」盡（ク）に衣を霑「ウルヲス」、東ノ方

282 都－門を望て馬に信て「マカセテ」歸(ル)。々(リ)＿来に「レヽハ／１．レルニ」池モ－苑モ、皆舊に依ヘリ、太－液の芙－蓉、未－央「ヒヤウ」の

283 柳。此に對て「ムカテ」如何シテカ、涙垂レ不む、芙－蓉は面の如（ク）柳は眉の如（シ）。春の風に桃－李の

284 花の開日、秋の雨に梧－桐の葉落（ツル）時。西－宮ノ、南－内に秋の草多シ、落葉

285 階「ハシ」に満て紅、掃「ハラハ」不。梨－園の弟－子、白－髪、新なり、叔「シヨウ」の－房阿－監「カン」、青－蛾

286 老たり。夕－殿螢飛て思、悄－然たり、秋の燈、挑「カヽケ」＿盡て眠(ル)こと能（ハ）不。遅－々たる鐘－

287 漏「ロウ」初て長（キ）夜、耿「カウ」－々たる星－河の曙むと欲（スル）天。鴛－鴦、瓦冷「ヒ／１．ス」て霜－花重（く）、

288 舊キ＿枕、故キ＿衾「フスマ」、誰と〔与〕共セム。悠「イウ」－々たる生－死、別て年を経たり。魂－魄曽て「カツテ」来て夢「□□」に入ず。

289 臨－邛「リムケウ」の方－士、鴻－都の客、能ク精－誠を以て魂－魄を致す。君－王展「テム」－轉の思に感（スル）か為に

290 遂に方－士を教て慇－懃に「ネムコロニ」覓「モトム」。空を排「ヒラキ」、氣に馭て「１．ノテ」奔こと電の如（ク）、天に昇「ノ」(リ)、地に入て

291 之（ヲ）求ルこと、遍「アマネ」(シ)。上は碧－落を窮「キハメ」下は黄－泉にて「□□□」、兩ツノ處、茫－々と（シ）て皆見「ミ」不。忽に

292 海－上に仙－山有と聞（ク）、々は虚－無の縹眇「ウ」間に在（リ）。樓－殿、玲－瓏五－雲起「ヲコレリ」、

293 其の上、綽「1．タク」－約と（シ）て仙－子「1．ノ□ラハ」多（シ）。中に一－人「ノ」有（リ）、名は玉妃と、雪の膚「ハタヘ」、花の皃「カヲ」、参－差「シムシト」(シ）て「タル」

294 是「□」なり。金－闕の西－廂に玉の扃「トホソ／1．トサシ」を叩ク、轉「ウタヽ」、小－玉を教「シ」て雙－成「フタカタ」に報セシム。聞＿道「イフナラク」漢－家

295 天－子の使なりと、九－花の帳の裏に夢の中驚（ク）。衣を擥「トリ」、枕を推て起「タチ」て徘－徊す。珠ノ－

296 箔、銀ノ－屏「ヤカキ／1．ヘイ」、邐「レイ」－迤「ヰ」と（シ）て開たり。雲－鬢「ミスラ」、半（ハ）＿偏「クタシ／1．ミタレ」て新ナル＿睡「ネフ」(リ）覺たり「サメタリ」、花の冠、整「ツクロヘ」不（シ）て

297 堂より下「オ」て来（ル)。風、仙ノ－袂を吹て飄－颻と（シ）て舉「アカル」、猶、霓－裳、羽－衣の舞に似る。玉の＿容「カホ／1．エウ」、寂－

298 寞「ハク」と（シ）て涙、瀾－干たり、梨－花、一－枝、春、雨を帶（フ)。情を含（ミ)、睇「ナカシメ／1．ミルコト」を凝「コラシ」て君－王に謝セシムラク、一（ヒ)、

299 別て音－容「ヨ」兩「フタツナカラ」、眇－茫「ハウ」たり。照－陽－殿の裏「ウチ」に恩－愛歇「ツキヌ」、蓬－萊－宮の中に日月

300 長（シ)。頭を迴て人－寰「クワン」(ノ）處を下「クタシ」＿視レハ、長－安を見「ミエ」不(シ)て塵－霧コソノミを見ユ。空(シク)舊(キ)＿物を持「トリ」て

301 深＿情「ナサケ」を表「アラハス」、鈿－合、金－釵「シヤ」、寄＿将て「モテ」去「イヌ／1．ヌ」。釵は一－鈷を留（メ)、合は一扇「セン」、釵「カンサシ」は黄－金を擘「ツムサキ／1．ヒキ)

302 合は鈿を分テリ。但、心を教て「シテ」金鈿の堅「カタキ」に似「ニシメ／1．ミエシメム」て、天「アメ」(ノ）＿上は人「ヨノ」－間に會「タマヽヽ／1．カサネ）て相＿見。別に臨「ノソミ」て

303 慇－懃「ネムコロ」に（シ）て、重て詞を寄す、々の中には誓有、兩ノミ＿心知レリ。七－月七－日ノ、長生殿に、夜

304 半に、人無て私（サヽヤキ）に語（コトセシ）時。天に在（テ）は、願は比－翼「ヨク」の鳥作「タラム」、地に在（テ）は、願は連－理の枝為「タラム」。

305 天長ク、地久シキ、盡（ル）こと時に有とも、此恨（ミ）は綿「メム」々と（シ）て絶（ユル）＿期無（カラム)。

資料２《声点一覧》

（行数）	（被注字）	（加点声点）	（行数）	（被注字）	（加点声点）
263	「長」	上声点	271	「重」	去声点
278	「旌」	平声軽点	278	「旗」	平声点
296	「邐」	上声点	296	「迤」	上声点
301	「釵」	平声軽点	301	「鈷」	上声点
304	「語」	上声濁点			

＜註＞

＊１　白居易の生没年：大暦七年（772）～会昌六年（846）

＊２　吉田兼好『徒然草』にも「文は文選のあはれなる巻々、白氏文集、老子のことば、南華の篇。此の國の博士どものかけるものも、いにしへのは、あはれなる事おほかり。」とある。

＊３　太田（1997）上204ｐ参照。その他の６巻は平安末～鎌倉初期頃の書写本であり、奉重とは何ら関係はないとある。

＊４　訓点は博士家の紀伝点である。

＊５　巻四十七、巻五十二の奥書に冷泉家との朱注がある。

＊６　巻十二、巻五十二は現在、大東急記念文庫蔵、巻四十九、巻五十九は国立歴史民俗博物館蔵（旧田中教忠蔵）である。

＊７　恵蕚法師は嵯峨天皇の代に入唐求法した学僧であり、義空を伴い帰り、禅宗を伝えるのに功があった。

＊８　「朝夕の言種に翼をならべ枝をかはさむと契らせたまひしに、かなはざりける命のほどぞ、つきせずうらめしき。」と、「長恨歌」における「比翼連理」の誓いを思い起こす表現がある。新間（1993）に詳しい。

＊９　「長恨歌伝」と「長恨歌」の関係については太田（1997）、近藤（1978）、新間（1993）、渡辺（2004）参照。

＊10　金沢文庫本中、大東急記念文庫蔵本及び天理図書館蔵本の計20巻における書込み音注は、巻によって数に偏りがあることは既に明らかとなっている（渡辺（2002））。

＊11　「長恨歌」におけるヲコト点と仮名点の重複は13字（ヲコト点加点字297に対し重複率約４％）である。尚、「長恨歌」に前置する「長恨歌伝」におけるヲコト点と仮名点の重複は112字（ヲコト点加点字499に対し重複率約22％）であり、重複率がより顕著である。（渡辺（2004）参照）

＊12　『訓点語辞典』「鎌倉室町時代」参照。執筆は小林芳規博士。

＊13　京都博物館増（神田喜一郎旧蔵）二巻。「新楽府」五十首を巻三と巻四に収めたもの。「新楽府」の訓点資料として現存最古。藤原式家の

茂明が嘉承二年に本文を書写し、六年後の天永四年に訓点を施した。
＊14　渡辺（2004）参照。

【参考文献】

太田次男（1997）『旧鈔本を中心とする白氏文集本文の研究』（勉誠社）
川瀬一馬（1984）「金沢文庫本白氏文集　覆製解説」（『金沢文庫本白氏文集（四）』、勉誠社）
近藤春雄（1978）『唐代小説の研究』（笠間書院）
新間一美（1993）「白居易の長恨歌－日本における受容に関連して－」（『白居易研究講座第二巻　白居易の文学と人生Ⅱ』、勉誠社）
礪波護（1993）「白居易の生きた時代」（『白居易研究講座第二巻　白居易の文学と人生Ⅱ』、勉誠社）
吉田金彦・築島裕・石塚晴通・月本雅幸編（2001）『訓点語辞典』（東京堂出版）
渡辺さゆり（2004）「訓点資料として見た「長恨歌伝」「長恨歌」の訓読に関する一考察－金沢文庫本『白氏文集』巻十二所収の場合－」（「日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開」国際学術会議予稿集、北海道大学大学院文学研究科「日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開」事務局）
渡辺さゆり（2002）「金沢文庫本白氏文集に書き込まれた反切注について」（『訓点語と訓点資料』第108輯、訓点語学会）

【付記】

本稿は札幌大学大学院文化学研究科において平成16年度日本語特論の授業テーマに基づき、その内容をまとめたものである。文化学研究科文化学専攻高橋哲氏、吉田玄氏、周文姫氏、元谷靖宏氏が日本語特論を履修し、活発な意見交換を行うことができた。本稿をまとめる上で貴重な意見となったことを記して感謝申し上げる。